

横浜市小学校社会科研究会

5 学年部会

## 研修会記録

第 5 号

令和6年 10月 2日

横浜市小学校教育研究会

会長 沼田 留美子

横浜市小学校社会科研究会

会長 高畠 聡

同 学年部長 田澤 哲哉

【提案日時】

10月 2日 (水)

提案 山崎 聡馬 先生 (川上北小)

【会 場】

横浜市立 平沼小学校

司会 伊藤 夏芽 先生 (緑園学園)

記録 和田 愛子 先生 (大道小)

### 1 提案内容

単元名「わたしたちの食糧生産の未来 ～消費者と生産者の目線から学ぶ食糧生産のこれから～」

### 2 提案者より

総合的な学習の時間で「子供食堂」について学習しており、子どもたちは「食」に関心をもっている。本単元にも関心をもって取り組むことができた。また、本単元は米作りと漁業の学習を生かしたものであり、前単元で学習した「後継者問題」「和食離れ」を踏まえて学習に取り組むことができた。

#### 視点①

○これまでの学習を振り返り、対話をもとにしてつくった単元を見通す学習問題について

導入部分で日本の食糧自給率は38%と低いことをおさえ、子どもは「これからの日本の食糧生産を守るためには、国産の食材を購入していくべきだ」と考えていた。「輸入をストップすればいい」という極端な考え方もあったが、学習を進めていくなかで、バランスをとることが大切だと考えることができていた。

○一般的な事実と、子どもの発見をすり合わせる活動について

子どもたちは、日本は食糧自給率が低いため、給食も輸入のものがほとんどなのかもしれないと考えていた。そこで、直近4日間、給食で使われた食材の産地を調べ、白地図にまとめると、国産のものも多く、子どもから「なぜ？」を引き出すことができた。給食用に食材を提供しているK農家に取材をすると、「土がついているような本物の野菜を食べてもらいたい。近くにもこんなところがある、国内産でがんばっていることを知ってもらいたい。」と話している。子どもは「K農園がどうして給食用に食材を送っているのか、栄養士はどうしてこんなに国産のものを使用しているのか」と疑問をもつことができた。

#### 視点②

① 子どもの気持ちの揺らぎからつくる本気の学習問題について

栄養士とK農家が「輸入も大事」と言っていた事実が、子どもたちの気持ちを揺さぶることになった。一方で、「輸入も大事」と意見をもっていた子どもの考えを活用することができなかった。

② これまで扱った資料や板書を生かして考えられる自分の意見、それを伝える学習について

子どもは、これまでの米作り、漁業の資料も活用して自分の考えをもつことができていた。自分の意見に自信をもって発言する子どもが少ないため、フリーな時間をとり、誰とでもいいから意見を共有することになっている。友達と意見を共有することで、新たな気づきと自信をもつことができていた。

### 3 協議会

#### 視点①

##### 振り返り、前時の学習、地域とのつながり、単元づくりについて

- ・「日本の食糧生産の課題を解決するために大切なことは何だろう」という単元を見通す学習問題が難しかった。
- ・本気の学習問題は「輸入と国内産どちらも大切」と捉えることができていたが、「輸入をしないと、好きなものが食べられない。」という視点をもたせると、スムーズに考えられたのではないか。
- ・消費者としての視点をもったり、地産地消の店を紹介したりできればよかった。
- ・導入の食料自給率の低さ、危機感から考えられてよかった。

#### 視点②

##### 子どもたちが食料生産の未来について多角的に考える姿がみられたか。

- ・学習問題が子どもの考えのずれから成立していたため、「なんで輸入の方が大事なのか」を考えることがスムーズになった。輸入の良さ、デメリットどちらも出るとよかった。
- ・根拠をもって話ができればよかった。
- ・K農園を踏まえた視点が必要だった。肉や魚の生産者の視点も踏まえて考えられるとよかった。
- ・子どもから「安いことが大切」という言葉があったが、どのような視点で購入をする必要があるのか考えられるとよかった。
- ・「持続可能」という言葉の例をあげて、自分の生活に置き換えて考えられればよかった。
- ・生産者と消費者のバランスが考えられるとよかった。
- ・国内産の発展についても考えられるとよかった。

<講師の先生より> 豊岡小学校副校長 高原 洋介先生

「どんな子に育ててほしいか」を考えて授業をすることが大切で、常に意識して授業をしてほしい。今回の学習は、単元を通して、人との出会い、調べたことのデータ化・資料化、既習を生かした学習の積み上げ、フリータイム、変容を見とる振り返りがあってよかった。総合的な学習の時間で「子ども食堂」を取り上げていたり、給食を扱ったりと、子どもに材を身近にする工夫がみられた。フリータイムでは、友達との意見の違いから、新たに自分の考えを深めることができていたのではないか。

本気の学習問題と実際に話し合っていた学習問題「国内産か、輸入か、どちらを推進するべきか」にズレがあったと感じた。子どもの考えを素直に取り入れ、本時の学習問題は「食材は国産を使っているのに、(K農園と栄養教諭は) どうして輸入が大切だと言ったのだろう。」でもよかったのではないか。子どもは「価格・希少性・農家を守る・選択肢を増やす・持続可能」という着眼点で、多面的に考えていた。もっと消費者や生産者の立場から「多角的」にこれからの食料生産について考えられるとよかった。食糧自給率や生産量の変化、国際情勢や食品ロスといった「現状」、食の安全性や価格を意識する「消費者」、スマート農業や温暖化対策を考えた「取組」、後継者不足や肥料高騰が関わる「生産者」といった様々な視点から、考えること(食糧生産が国民生活に果たす役割、食糧生産に関わる人々の働き)にせまりたい。C3児「日本のものをどんどん輸出しちゃえば…」の発言をきっかけに、視点を広げていくこともできたかもしれない。

「人の営みに学ぶ」ために、身近な栄養士・K農家、自分の生活体験(消費者)、既習事項(米農家、漁師)を根拠に、社会的事象の見方・考え方を働かせて、我が国の食料生産の未来を考えていってほしい。

文責 和田 愛子(大道小学校)